

[果樹部門]

## 5. 果肉がしっかりした「紫苑」を生産するための満開期の新梢の太さと葉色の目安

[要約]

ブドウ「紫苑」は、満開時の新梢基部径が太いほど、また、葉色が濃いほどしっかりした果肉の果実が生産できる。満開時の新梢基部径は10mm以上、葉色はSPAD値で45以上が望ましい。

[担当] 岡山県農林水産総合センター農業研究所 果樹研究室

[連絡先] 電話086-955-0276

[分類] 情報

---

[背景・ねらい]

ブドウ「紫苑」は岡山県で「次世代フルーツ」として生産振興を図っている。しかし、現地で生産される果実は園地や樹による硬度のバラツキがあり、年末まで硬く維持できないことが課題となっている。そこで、成熟期である10月下旬にしっかりした果肉の果実が生産できる満開期の新梢基部径及び葉色を明らかにする。

[成果の内容・特徴]

1. 満開時の新梢基部径が太いほど10月下旬の果実は硬く、新梢基部径が10mm以下の樹では果実が軟らかい傾向にある（図1）。
2. 満開時の葉色が濃いほど10月下旬の果実は硬く、葉色が45以下の樹では果実が軟らかい傾向にある（図2）。

[成果の活用面・留意点]

1. 10月下旬に果肉がしっかりしている場合は、施設を加温することで、12月の歳暮需要期まで果実品質を樹上で保持することができる。
2. 樹勢が弱いと新梢基部茎が細くなりやすく、満開時の葉色は薄くなりやすい。弱勢化の一因として着果過多が考えられるため、適正着果量（2.1t/10a）を遵守する。

[具体的データ]

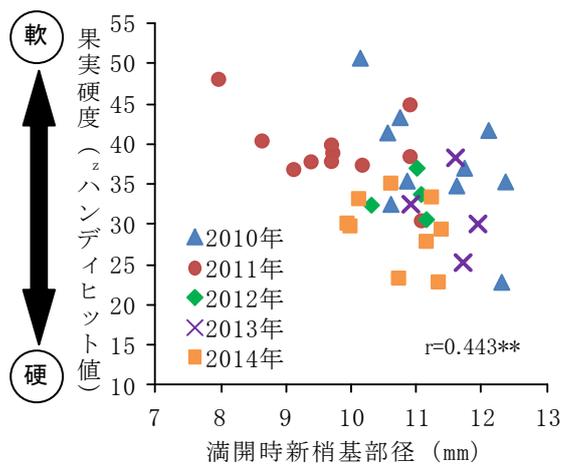


図1「紫苑」の満開時新梢基部径と10月下旬の果実硬度との関係  
z値が小さいほど果実が硬いことを示す。  
図中の\*\*は1%水準で有意な相関があることを示す。

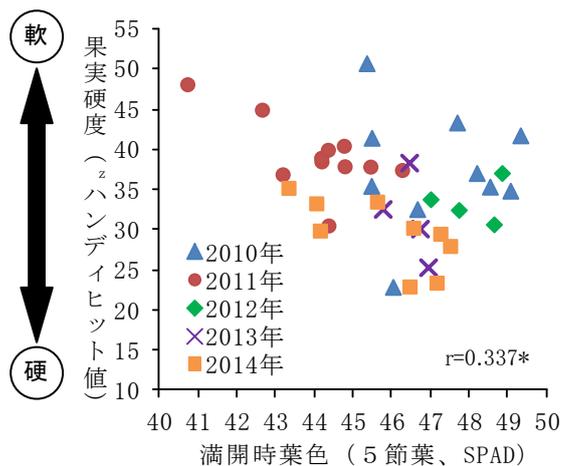


図2「紫苑」の満開時葉色と10月下旬の果実硬度との関係  
z値が小さいほど果実が硬いことを示す。  
図中\*は5%水準で有意な相関があることを示す。

[その他]

研究課題名：「紫苑」の出荷期間拡大技術の確立

予算区分：県単（儲かる次世代フルーツ等果樹産地育成対策事業）

研究期間：2012～2014年度

研究担当者：高橋知佐、安井淑彦、中島譲

関連情報：1) [平成23年度試験研究主要成果、27-28](#)

2) [平成24年度試験研究主要成果、33-34](#)